



図書館だより



2025年
10月24日発行

秋草学園高等学校 図書館

二学期の中間考査が終わりました。約1か月、勉強に、運動に、部活に、趣味に打ち込めると思います。そこにぜひ「図書館」を加えてください。本を読む、勉強をするのが図書館の役目なのですが、これに「勉強に役立つ・頭を活性化させるゲーム」企画が立ち上がります。『57577』という短歌を詠むゲームです。

また、以前も紹介しましたが、図書館には「百人一首かるた」が2セットあります。教室や生徒ホールで百人一首大会の練習をするもよし、国語の勉強としてかるたの絵とともに短歌を覚えるもよし、たくさん使ってください。

2025年 第79回 読書週間が始まります

10月27日～11月9日は「読書週間」です。今年の標語は「こころとあたまの、深呼吸。」です。

漠然としたテーマです。司書は『カフネ』を思い浮かべました。でもこの本は何度も紹介していますね。

ゆとりシリーズ

B914.6-7-1 『時をかけるゆとり』

朝井リョウ 著 文藝春秋



エッセイのよいところは、日常に近いことです。小説が突き詰めた構成であるのに比べ、作家の日常がわかるのがエッセイです。そして、作家の性格が反映されているのもエッセイ。この本は、「よくぞそんなばかばかしいことをしたもんだ」「うんうんそうだよね」系です。頭をからっぽにして読めば、さらに頭がからっぽになります。また、こんな楽しそうな日常を送っている作家の小説も読んでみようかなというきっかけにもなります。

このエッセイは好評につきシリーズになっています。『そして誰もゆとらなくなった』『風と共にゆとりぬ』もあわせてどうぞ。

絵本のような童話のような、そうでないような

726-マ 『君がいるから』 まなつ&ふゆ 著 大和書房

誰かと一緒にいるだけでいいんだと思わせてくれるペンギンや猫たち。絵本のような表紙ですが、誰が読んでも共感を得られる、ほっこりした内容です。

929-ハ 『涙の箱』 ハンガン 著 評論社

昨年のノーベル文学賞を受賞したハンガンの童話です。受賞作の小説は読むのがつらくなる内容ですが、本書はやさしくて美しい童話です。装丁も素敵です。

短歌関連

911.1-ナ 『太陽帆船』 中村森 著 KADOKAWA

とにかくきれいな短歌集です。恋愛、家族、季節のうつろい、幸福感、疑心暗鬼、別れ、自然、言葉、これらが人生の走馬灯のように流れていきます。短歌は堅苦しく小難しいものだと思っている人に、短歌とは自由でやさしいものだと教えてくれます。



911.1-ナ 『57577』

なべとびすこ 原案 幻冬舎

上に紹介しているように、これはゲームです。「5文字」札、「7文字」札をシャッフルして上手に短歌にしなければならぬので、思い通りにならないスリリングな楽しさを味わえると思います。多くの学校で、図書館で遊べるゲームとして採用されています。

新着コーナーの気になる本

O15-ツ 『読書が苦手だった司書が教える世界一かんたんな図書館の使い方』 つのだ由美こ 著 秀和システム



本を読まない司書こと私が紹介するのが「読書が苦手だった司書」の本です。私はかねがね、「図書館」という名称は「ミュージアムライブラリー」「情報センター」などがしっくりくると思っていましたが、それは「この本」にすべて書いてありました。あくまで「図書≠(必ずしも)本」の立場です。知りたい気持ちに対応する機関であり、好き勝手にできる場所(ただし、全図書館共通禁止事項の飲食・大声・著作権侵害を除く)であることに同意します。そして、私からは「本は全部読まなくていい。1ページでも読み知りたいことがわかればそれでいい」とアドバイスします。

司書の今月はこの本読みました

日本で初めて女性総理大臣が誕生しました。『世界を変えた100人の女の子の物語』(エレナ・ファヴィッリ、フランチェスカ・カヴァッロ/河出書房新社/280-円)には古今東西の初めての道を切り開いたり、画期的な行動をした女性のエピソードがつつられています。おとぎ話のように「むかし、むかし」で始まるひとり1ページの文章は、コンパクトな内容で読みやすく、大人の後ろに隠れているような少女が大きく羽ばたく内容です。「マリ・キュリー」「オノ・ヨーコ」などの有名なところ、「ナンシー・ウェイク」「エイダ・ラブレース」など司書が聞いたことのないお名前がずらり。もちろん、高市首相が政治に目覚めるきっかけとなった「マーガレット・サッチャー」元英首相も載っています。

そして、みんな順風満帆ではなく、紆余曲折の上成功をつかみ取ったことに生きる勇気をもらいました。【横関】

